



「団子づくり」



穴掘り



2024.1.31

園長だより NO97

新しい年を迎えてから早いもので1か月が過ぎようとしています。寒さも増して体調を崩しやすくなるこの季節、しっかり食べて、十分な休息を心がけて下さい。

子どもの成長を実感する・成長の土壌

進級、卒園を数か月後に控える時期には生活の中で子ども達の成長を実感できる場面に多く出会います。園庭で転んで泣き出した子の傍らにそっと寄り添い「だいじょうぶ？」

「いたいところあるの？」と頭をなでたり、背中をさすってあげたり、そんな姿を日常でよく見かけます。優しい感情、他者のことを思ってあげる感情や行動、生活の中でさりげなく獲得していることに嬉しさを感じます。

大きい組(3歳児以上)は仲間と共に遊ぶことに楽しさを感じ、遊びをより楽しくするためにいろいろ知恵を出し子どもなりの協力をし協同性を育てている姿も顕著にみられています。

5歳児は泥団子づくりが遊びに定着し「泥団子研究所」と命名され園舎の片隅で日々、こつこつとつくり、磨き上げられています。ある男の子が遊びの発端をつくり担任保育士が寄り添い一緒にやる日々を通じて、楽しいことは地道に広がっていきました。どこの保育園でもあそびのツールとして取り上げられています。魅力のある遊びはいつまでも大切に受け継がれていきます。

子ども達の好奇心、探求心は旺盛でみていて大人もワクワクします「どうしたら固くつくれるか」「どんな土をつかえばいいのか」土を調合したり、水の分量を加減してみたり幾つもの考えたことを遊びの中で試していきます。

私たちは常々、「子どものやりたい、やってみたい」を実現させてあげることに注力しています。とことんできる時間をつくり！とりくめる空間をつくり！子ども達の要求があればできるだけ寄り添い、一緒に遊べます。

話がそれますが保育園には未来の保育士を育成するお手伝いで「実習生」を年に数名、受け入れています。実習先を巡回している教員に「どんな園ですかと尋ねられることありますが私の返答は「遊びほうけています」と答えます。子どものより良い成長には言葉は悪いですが「遊びほうける」ことが一番の成長の糧と知っているからです。好奇心旺盛で探求心に富、仲間と喜び生活を共にできる協同性などは遊びを中心とする生活の中で学び、育っていくと思っています。

子どもの育ちや成長を評価するとき、※評価という言葉は使いたくないのですが・・・

「できた できなかった」作ったり、描いたものをみばえで「良い 悪い」と決めてしまったり、大人の価値観、指示や教えに 順応できない または大人の考えた答えに順応し(行動)を起こせない子を正しいことではなく、間違っていると評価してしまう。

こんな風潮はいまだに保育業界には残っています。ひとり、ひとりを大切にする保育、子ども主体の生活をつくろうと取り組んでいる昨今では時代遅れも甚だしい保育です。

大人の教え込み、早期教育の偏り、知識、技術の詰め込みに対する「結果重視」の保育の在り方から子どもが主体の生活をつくり子ども自らが考え、学び育っていく環境に変化することが大切と考えています。

遊びが成長の糧

泥団子の話題にもどりますが、「たかが泥団子、されど泥団子」ですが何が子ども達を夢中にさせていくのでしょうか

多くを語りませんが子どもの(子ども達の)遊びの中には多くの思考があります。自分で考え、学び、アクションを起こしてみる。一人でもくもくと取り組むことから、様々な知恵を工夫を仲間との対話の中でお互いに伝え合える。失敗体験も成功体験もある。できたとき、子どもなりにうまくいったときは喜び、時には仲間と大いに喜ぶこともある。

学力と言われるものの取り組みでは獲得できない生きた学びがあるといえます。

子どもの遊びは大切と言われ続けていますが本質を見失っている園が多いことでしょう。やはり大人(保育士)が一方向的に保育内容を考え、そのルールに乗せ、その枠からはみ出さないように等質に教え込もうとする。作品展や制作展という行事でもそれぞれの個性みられずどれも同じようなものを製作させているなんて園も少なくないでしょう。子ども達が

やりたくて取り組んでいるものであればおのずと個性が出るものです。規格品のように概ねの出来栄の枠を大人が決めていけばそれなりの等質感がでてしまうものです。

かなり昔のことですが幼稚園で働いていた時に粘土製作を行いました。ペン立てや花瓶をつくるという大人の都合で作らせるものです。私は子どもの楽しさを実感できるものには程遠いと印象を受けました。

その数年後、作りたいものをつくろうと子ども達とあれこれ話し合い、それぞれがしっかりイメージを持てるように進めていく、当然、子どもがとことん満足できる時間も用意する。粘土もひとり〇〇グラムなどと言わず使いたければいくらでも使わせてあげようと考え取り組みました。子どもの見せる姿は異なりました。動物、のりもの、宝石箱、貯金箱などそれぞれが夢中に取り組んだ、制作の過程で仲間との会話も弾む、それぞれの思いが反映される。ひとりの男の子は大きな、大きな象をつくった。たしか3キロ位の粘土を使っていた。大人の考え方ひとつで子ども姿は激変する。まさに目からうろこが落ちる経験であった。

目の前の子ども達のことをよく見て、感じ子ども達にとってより良い活動に結び付けてあげることが継続的に大切であること、ひとり、ひとりを大切にする保育の具体的内容をしつかりと考え、保育に反映することが現在の課題でもある

(おおぞら保育園 園長 廣部信隆)

